

《論文》

曹禺『雷雨』 侍萍の人物形象について

瀬戸 宏

要旨

一九三四年に発表された曹禺『雷雨』（『文学季刊』第一卷第三期）は、二一世紀の今日では中国現代文学、演劇を代表する作品である。劇中人物の侍萍は、辛酸を嘗めた人物で、劇全体の中でずっと最も同情される人物であった。本稿では、まず侍萍の境遇を概観する。侍萍は無錫の周家の屋敷の召使だったが、周家の若旦那の周樸園と愛し合い、二人の子を産む。しかし周樸園は突然お金も格式もあるお嬢さんと結婚することになり、侍萍は周家から追い出される。侍萍は身投げするが、助けられる。周樸園らは侍萍が死んだと思い込む。三〇年後、侍萍の娘の四鳳は天津の周家に召し使いとして仕え、周家の長男周萍と愛し合っている。周樸園の後妻の蘩漪は、周家の息苦しさから義理の子の周萍と関係を持ってしまう。周萍は蘩漪との関係を嫌い、四鳳と関係を持つが、それを察した蘩漪は四鳳を周家から追い出すために侍萍を呼びつける。そのため侍萍は三〇年ぶりに自分を捨てた周樸園と再会してしまう。本稿では、侍萍の性格と彼女が持っている宿命論を考察し、近代性(modernity)を強く備えているとされる『雷雨』の中での侍萍の役割および侍萍という人物形象自体の近代性を考察する。侍萍の人物像は、前近代の要素を残すと同時に近代性をも備えている。そのため、『雷雨』は一九二〇年代の中国の現実をよく反映した作品となることができたのである。

一九三四年に発表された曹禺『雷雨』（『文学季刊』第一卷第三期）は、二一世紀の今日では中国現代文学、演劇を代表する作品となっている。『雷雨』のテキスト形成には複雑な経過がある¹が、本稿では『曹禺全集』²掲載のテキストを用いる。

作品の主要部分は資本家周樸園の家庭で展開される。筋の緊密な進行につれてしだいに隠されてい

た資本家家庭の秘密が暴露されていく。周樸園は青年時代に召使いの侍萍と愛し合い、二人の子まで生まれる。しかし周樸園は“お金も格式もあるお嬢さん”と結婚することになり、そのため侍萍は長男(周萍)を周家に残し、次男(魯大海)を連れて川に身投げしてしまう。周樸園の現在の妻の蘩漪は周家の雰囲気強い拒否感を覚え、義理の子の周萍と関係を持ってしまう。しかし周萍は蘩漪との関係に罪悪感を持ち、蘩漪との関係は切れ、召使いの四鳳と愛し合い、周家から出て行こうとする。蘩漪は周萍と四鳳の仲を裂き、自らも周家からの脱出を画策し、四鳳の母を呼び寄せる。実は四鳳は侍萍の子で侍萍は生きており、蘩漪の画策で周家を訪ね、そのため侍萍と周樸園は再会してしまう。蘩漪の行動は、最後に三人の人物が悲劇的な死をとげる『雷雨』事件を引き起こす。

曹禺に関する最初の単独専門著作で今日も意義を失わない銭谷融『「雷雨」人物談』³は、『雷雨』に登場する八人の主要人物のうち、「『雷雨』という悲劇のなかで、経歴が最も悲惨で、受けた打撃や迫害が最も大きいのは、侍萍であろう。だから、彼女は劇全体の中でずっと最も同情される人物であった」⁴と評している。侍萍は『雷雨』事件の三十年前に周樸園に愛され一時は正妻に近い立場を周家で与えられながら、家のために金持ちのお嬢さんと結婚する周樸園に棄てられ悲惨な生活を送らざるを得なかった。本稿では、まず侍萍の境遇を概観した後、自己の歩みを宿命と認識してしまう侍萍の精神状態と、その宿命論の内容を分析し、そこから『雷雨』の主題に逼りたい。

—

まず侍萍の境遇を概観したい。『雷雨』事件を一九二二年とした時⁵、劇中の台詞などから推測される侍萍の人生の整理である。

侍萍は一八七五(同治一四)年に無錫の梅家に生まれる。母親の梅おばさん(梅媽)は当時無錫に邸宅を構えていた周家の召使いになった。梅家の実情は定かではないが、召使いになるという状況から、梅家は裕福ではない家庭であったことは容易に想像できる。そして侍萍も働ける年齢になると、おそらく母親の紹介で周家の召使いになった。一八九二、三(光緒一九)年頃と推定される。無錫は中国有数の景勝地で、周樸園も「無錫はよいところだ」⁶と回想している。無錫が若き周樸園と侍萍の出会いの場所とされているのは、二人が幸福だった時期をより美化する効果があると思われる⁷。

娘の四鳳は第一幕冒頭で、母の侍萍は「勉強したことがある」⁸と述べている。侍萍の幼少女時代(一八八〇年代)には、女学校は上海などでキリスト教関係のものがわずかに存在していただけで、無錫にはおそらく学校という形態の女子教育機関は存在していなかったと思われる。侍萍は私塾で学んだのか。それとも晏学が推定している⁹ように、侍女として周家の女性に仕える中で、字を習得しいくつか書籍を読んだのか。その詳細は不明だが、事件直前まで済南にいた侍萍は四鳳と手紙のやりとりをしており、自分で手紙を書く程度の学力はあった。これに対して夫の魯貴は妻の侍萍の字も書けない¹⁰。

侍萍が周家に召し使いとして仕えだしてからまもなく、周家の若旦那(少爺)である周樸園がドイツ留学から帰国した。周樸園は一八六七(同治六)年生まれと思われるので、この時周樸園は二十代半ばで、侍萍は一七、八歳だった。周樸園は、まもなく侍萍を見初め、愛し合うようになった。当時の侍萍は、おそらくドイツで恋愛至上など近代思想に触れていた周樸園の心を引きつける、知的魅力が漂う美少女だったのであろう。侍萍の側も、周樸園を拒否することはなかった。当時の周樸園も、侍萍の心を

つかむ魅力的な男性だったと思われる¹¹。だが周樸園から好意を寄せられていると知った時、侍萍の心に浮かんだのは愛情だけではなく、社会地位上昇の一つのチャンスだという思いもあったのではないか。前近代の中国で、下層階層の女性が下層身分を脱する有力な手段は、富裕層の男性の妻になることだった。妻でなくても、妾(第二、第三夫人)でもよかった。侍萍も、周樸園の心を捉え自己の上昇志向を満足させようと、意を尽くした筈である。周樸園と愛し合いはじめた頃の侍萍は、自己の身分から、周樸園の妾になり周家の中で一定の位置を占めることができれば、それで満足だと思っていただろう。しかし、ドイツで階級平等など近代思想に触れた若き周樸園は、侍萍に対して真摯な愛情を抱いた。そして侍萍を正妻にしようと思い始め、周家の中で正妻のように侍萍を遇しだした。侍萍が男子(周萍)を産んだことも、それに拍車をかけただろう。第二幕で、侍萍が身投げ自殺したと思い込んでいた周樸園が、侍萍にこう語りかけるのは、侍萍を正妻として扱っていたことを示していると思われる。

「おまえの誕生日－四月一八日－毎年私は覚えている。すべておまえが正式に周家に嫁いだ人として扱っている。おまえが萍を生んで病気になる、いつも窓を閉めていた、この習慣も私はみな残している。おまえを忘れず、私の罪をつぐなうためだ。」¹²

侍萍の上昇志向を示唆する台詞もある。第三幕で、四鳳が周家の坊ちゃんと何か関係があるらしいと気づいた侍萍は、四鳳にこう語りかける。

「お母さんは一步步き間違えて、次々に歩き間違えていったのよ。四鳳、私はおまえという娘を生んで、自分の子がまたお母さんのようになることはさせられないのよ。」¹³

一步步き間違えた、とは、若い侍萍が、周樸園と特殊な関係になれる、と思ったことを指しているのだろう。次々に歩き間違えた、とは、周家という上層階級の正妻という中心人物になれると錯覚し、そのように振る舞っていたことをおそらく示している。

だが現実には、侍萍に残酷な復讐をした。一八九四(光緒二〇)年周樸園は突然“お金も地位もあるお嬢さん”と結婚することになったのである。そのためこの年の旧暦大晦日(一八九五年一月二十五日)に侍萍は周萍を残し屋敷を追い出され、絶望の中で生まれて三日後の魯大海を連れて川に身投げしたのである。この周樸園の急な結婚や侍萍に対する過酷な仕打ちは、これまで銭谷融などによって¹⁴周樸園が自身で決定したと解釈されてきた。『雷雨』の内容や当時の大家族の意思決定構造を考えると、これらは若い周樸園ではなく、当時周家の実権を握っていた年配層が決め、周樸園は従うほかなかったのではと思われるのだが、この問題は別の場で考察した¹⁵ので、ここでは繰り返さない。

侍萍は身投げして助けられたのだが、周家も無錫の人々も侍萍が死亡したと思い込んだ。そして侍萍は永遠に無錫を離れ、苦難の道を歩むことになる。

二

周家から離れた後の侍萍については、第二幕で周樸園に次のように語る侍萍の台詞があるだけである。この時の侍萍は周樸園に自己の正体を示す直前で、失踪した侍萍のその後を知っているという立場で、周樸園に自己の境遇を語っている。

「彼女の運命はたいへんつらかったのです。周家を離れて、周家の若旦那はすぐにお金も格式もあるお嬢さんと結婚しました。独り者で、親戚も知り合いもなく、子どもを一人連れて異郷で何でもや

りました。物乞い、衣服の繕い、召使い、学校の用務のおばさん。(中略)子どものために、二回結婚しました。(中略)みんな下等の人です。人との出会いは、みなうまくいきませんでした。』¹⁶

侍萍と魯貴の間の子の四鳳は一八歳という設定で、侍萍と魯貴は一九〇三年頃結婚したと思われる。二人がどこでどのように出会ったか、まったくわからない。

侍萍は、生きるために「何でもやりました」と言うが、『雷雨』を丁寧に読むと、二つのことはしなかったことがわかる。一つは、この境遇の女性にありがちな娼婦になることである。もう一つは、決して周家をふたたび訪ねて金をもらおうとしなかったことである。

周家を訪ねなかったことは、侍萍が生きていると知った周樸園にも意外なことであった。侍萍の身投げは、周樸園が「三十年前に、無錫で有名なことがあった」¹⁷と語るように、当時の無錫でかなり話題になったようである。無錫で指折りの名家の坊ちゃんと深い仲にあった美貌の召使いが突然大晦日に身投げした、というのだから、人々の好奇心をかき立て、しかも侍萍は捨てられた女性として同情を誘っただろう。その召使いが実は生きていたとなれば、人々の好奇心はいっそう高まる。しかも数年にわたって周家に仕え、坊ちゃんの子までなしていたのであれば、周家の外に知られたくない秘め事も、侍萍は当然知っているであろう。ほおっておけば、侍萍はあることないことしゃべって、周家の体面をいっそう傷つけるかもしれない。それなら、ある程度の金品を渡して黙らせよう。周家の人間なら、当然そう考えるだろう。

しかし、侍萍は周家を訪ねなかった。侍萍は、一時は正妻に準ずる扱いを周家で受けていた。そのような自分に対する誇りや、自分を迫害した周家の人々や裏切った周樸園に卑屈な思いをしたくないという意地あるいは自己の尊厳を守ろうとする意思が、そうさせたのであろう。

娼婦にならなかったことも、侍萍の誇り、意地と関係があろう。自己の尊厳を曲げて不特定多数の男に体を売って生きていく、という生活態度は、彼女の誇りが許さなかったのであろう。

侍萍が強い意志の持ち主であることは、第三幕で周家の人間に復讐しようとする魯大海に向かってこう言って思いとどまらせていることからわかる。

「お母さんの気質を、おまえは知っているでしょう。おまえがもしおかあさんが一番心配していることをしたら、おかあさんはすぐにおまえの目の前で死にますよ。」¹⁸

それに対して、結婚は侍萍が望むものではなく、苦痛をもたらすものであったろうが、娼婦になることとは違って社会的体面を失うことではなかった。晏学は、侍萍が望まぬ結婚をしたのは、魯大海に、父親のない子、という後ろ指を指される思いをさせたくないからだろう、と推定している¹⁹。侍萍は二度結婚している。魯貴との結婚は、四鳳の年齢から見て周家を追い出されて約九年後の一九〇三年頃と推定される。この結婚の結果四鳳が生まれ、侍萍は魯貴に不満であったが、『雷雨』事件まで約二〇年間ともかく夫婦関係は維持されている。侍萍の言によれば、周家を追い出されてから魯貴との結婚の前に侍萍はすでに一度結婚している。この結婚がどのようなものであったか、『雷雨』からはまったくわからない。最初の夫の人柄も、死別したのか離婚したのかもわからない。作品中からわかるのは、この結婚もおそらく魯貴との結婚以上に不幸で数年間で終わり、侍萍は思い出したくもないのだろう、ということぐらいである。

ともかく侍萍は、『雷雨』事件当時は済南の女学校の住み込み用務員をしていた。月八元という低賃

金だったが食住は保証されていたようである。侍萍の勤務態度は勤勉、正直で周囲の人間の好感を勝ち得ていた。これは、勤務先の校長の夫人が、あなたのお嬢さんに、と言って銀の指ぬきを贈っていることから推測できるのである²⁰。

三

侍萍が再び周家に現れた時、三年前に始まった蘩漪と周萍の関係はすでに破綻しており、周萍は四鳳と男女関係を持っていた。周萍と四鳳の関係を察した蘩漪は、四鳳を周家から追い出すために母親の侍萍を済南から天津の周家に呼び寄せる。四鳳と周家の次男周冲があぶない仲になろうとしているということを口実に、侍萍に四鳳を連れて帰らせようとしたのである。だが周家に来たため侍萍は、周樸園と三十年ぶりの再会をしてしまう。『雷雨』の前半のクライマックスである。

だが、侍萍が周樸園と再会する前に、『雷雨』ではもう少し劇がある。

四鳳、魯貴に連れられて周家の邸宅に入った侍萍は、三人で語り合う。侍萍は、四鳳が金持ちの屋敷で仕えないように、と言っていたのに四鳳が周家で召使いをしていることに不満を漏らす。魯貴が去って四鳳と二人になると、侍萍は部屋の様子や家具がどこかで見たことがあるのに気がつく。四鳳が、ここは亡くなった最初の奥様の部屋だ、と言う。侍萍は、屋敷の持ち主の姓が周であることに改めて気がつく。それまでは、周というありふれた名字をさして気にしていなかったのである。そして四鳳から亡くなった奥様とされる写真を見せられて、ついにここが三十年前に自分を追い出した周家であることを知る。

そこへ、蘩漪が二階から降りてきた。蘩漪は、四鳳と魯貴を部屋から出て行かせる。蘩漪は、次男が四鳳に好意を寄せていると侍萍に告げる。侍萍は、四鳳と次男の周冲の間に怪しい点があると誤解し、すぐに四鳳を周家から辞めさせ、その後周家と会えないところに連れて行く、と蘩漪に言う。蘩漪もそれに賛成する。

そこへ、蘩漪が医者にみてもらおうとしないのにしびれをきらした周樸園が、部屋に入ってくる。蘩漪は捨て台詞をはいて、部屋から出て行く。こうして、侍萍は三十年ぶりに周樸園と二人きりになってしまうのである。

はじめ、周樸園は侍萍のことがわからず、新しく来た召使いかと思った。北京人民芸術劇院の『雷雨』初演で周樸園を演じた鄭榕は、この場面の周樸園を演じる際の演技を次のように語っている²¹。当初は自分の子を二人まで産んだ女性を数十年たったからといってまったく気がつかないことがあろうか、周樸園は侍萍に注意せず侍萍をよく見なかったのでわからなかったのだ、と解釈し侍萍の顔をみないように演じていた。ある時、中学時代(日本の高校を含む)に知り合った女性と数十年ぶりに再会したところ、まったくわからなかった。そこで、周樸園は最初は本当に侍萍が分からなかったのだと解釈を変えて、はじめから侍萍の顔を正面から見て演じるようにしたという。約三〇年の労苦が、一女性の表情をすっかり変えてしまった、ということはあることである。

この花山文芸出版社版『曹禺全集』で九頁におよぶ周樸園と侍萍の対話を読んでいると、あることに気がつく。侍萍にまったく気がつかない周樸園に対して、侍萍は少しづつ周樸園の記憶を呼び覚ますような言葉を投げかけているのである。侍萍は、なぜこのような行動をとったのだろうか。周樸園を

心から憎み二度と顔を合わせたくない、と思っていたら、「私は子どもの時から無錫で育ちました。」²²「光緒二〇年、今から三〇年以上前です。」「私は梅という名の若い女の子を知っています。」「旦那様の絹のシャツは全部で五着ではありませんか。どのシャツですか？」などと言わずに、適当に答えて退出すればよかった。あるいは、蘩漪が退出する時侍萍も共に退出して、周樸園とは初めからほとんど顔を合わせないようにすればよかったのである。

侍萍は、自分に気がついた周樸園にこう言った。

「あなたを探しませんでした。探しませんでした。あなたはとっくに死んだと思っていました。今日思いがけずここに來たのは、天が私をここであなたに会うようにさせたのです。」²³

この言葉に嘘はあるまい。しかし、第二幕での侍萍の行動を考えた時、侍萍には、三〇年の苦勞、恨みと同時に、やはり心のどこかに周樸園と再会したい、自分の境遇を訴えたい、という気持ちがあったのではなかろうか。あるいは、侍萍の周樸園に対する行動は、侍萍自身も予期しないものだったのかもしれない。それは、侍萍の心の奥底に、周樸園との幸せだった日々の思い出が沈潜していて、彼女自身にも思いがけないかたちで現れたのかもしれない。

そして周樸園がついに侍萍を認識した時、侍萍はその直後には周樸園を非難する言葉を発した。

「泣くですって？ふん、私の涙はとっくに泣き乾いてしまいました。私にはつらさはありません。あるのは恨みです。後悔です。三〇年毎日毎日受けた苦しみです。」²⁴

しかしこのような言葉を周樸園に対して発し、周樸園に自己の心情を理解させた後は、侍萍はもう周樸園に対して復讐しようとはしない。侍萍は、周樸園が差し出した五千元の小切手を引き裂いてしまう。侍萍が周樸園に求めたのは、周公館に残してきた長男－周萍に一目でも会うことだけである。

恋人あるいは夫に捨てられた女性が偶然の機会に捨てた男性と再会する、あるいは幽霊となって復讐する、という物語(負心戯)は、中国伝統演劇に多い。周樸園と侍萍の関係も、表面的には伝統演劇の負心戯に似ている。周樸園はおそらく金のために侍萍を捨てて“お金も格式もあるお嬢さん”と結婚し、侍萍は捨てられて苦難の道を歩むのである。しかし、侍萍は周樸園に復讐を試みない、処罰感情がない、という点で、侍萍は中国伝統演劇・負心戯の女性像とは大きく異なっている²⁵。

何が侍萍をこのような立場に置かせたのだろうか。

考えられる一つは、侍萍はすでに記したようにある程度は教育を受け、知性を持っていたことである。恨みを持つ相手に自己の苦衷を訴えることは、一度はなされていい。しかし、恨みに対して復讐で答えることは、結局は相手側に新たな恨みをもたらしことになり、復讐の連鎖が起こりかねない。その連鎖を断ち切るには知性が必要であり、侍萍はそのような知性の持ち主だったと考えられる。また侍萍がそのような知性を実行に移す強い意志を持つ女性であることも、すでにみた。

一方で、侍萍は“天”“命”の存在を信じる古い思想の持ち主でもあった。すべてが宿命だと諦観をもって自己の人生を眺める思考は、侍萍の精神にそれなりの平穩をもたらし、周家から追放された後の過酷な人生を生き抜く対処法でもあったろう。すべてが“天”の“命”によって定められたものであれば、復讐する必要もないのである。

侍萍には、このような新しい思考と古い思考が入り交じった性格の持ち主だったと思われる。いずれにせよ、周樸園に安易な復讐を行わず周樸園のとっさの金銭譲渡も決然として拒否する侍萍の行動

と性格には新しさがああり、『雷雨』の読者と観客に強い印象を残す。この場面の侍萍の行動は、明らかに個人の尊厳重視という近代性(modernity)の発露であり、侍萍の人物形象は確かに近代性を備えていることを示しているのである。『雷雨』からちょうど十年前に発表された魯迅『祝福』にも、“天”“命”の存在を信じる祥林嫂という女性が描かれている。しかし侍萍は祥林嫂とは異なり、再婚した女性は死後に地獄で二人の夫によって体を引き裂かれるという類の迷信をまったく信じてない²⁶。

四

『雷雨』第二幕では、侍萍と周樸園の対話が続いているところへ、男性の召使いが、屋敷の入り口で待っていたスト指導者で侍萍の子(そして周樸園の子でもある)の魯大海がしびれを切らして屋敷内に乱入したと告げる。周樸園は魯大海と会うことにする。魯大海は鉱山経営者としての周樸園を強く非難するが、実は他のスト指導者は魯大海を裏切ってスト解除協定に署名していたのだった。それを知った魯大海はいっそう口汚く周樸園を罵り、周萍に殴られる。実の兄弟が殴っているのをみた侍萍は嘆き悲しむが、自分の正体を明かすことができない。魯家の面々はすべて周家から解雇され、第二幕は終わる。

第三幕は、他の幕と異なり魯家の家である。魯家の人々が解雇されたのを知り魯家に同情した周冲が魯家を訪ね、繁漪から託された金を渡そうとして魯大海に拒否され寂しく帰っていく。

四鳳と周家の間に何かあると感じた侍萍は、四鳳を問い詰め、今後二度と周家の人々と会わないことを誓えと迫る。切羽詰まった四鳳は、「それなら、それなら、天の雷が自分を引き裂きます。」²⁷と叫ぶ。この部分も『雷雨』の山場の一つである。

だが、こう叫んだ直後に、四鳳は窓越しに四鳳を訪ねてきた周萍を家の中に入れ、そしてそれを魯大海に見られてしまう。魯大海は周萍を殴ろうとして侍萍に遮られ周萍は魯家から逃げ出す。四鳳も魯家から逃げ出して行方がわからず、侍萍は魯大海に連れられて四鳳を探して周家に向かう。

こうして第四幕で周萍、四鳳および侍萍、魯大海は再び周家に集まる。そこで侍萍は、周萍と四鳳がすでに関係を持ち、しかも四鳳は妊娠三ヶ月であることを知る。しかし周萍と四鳳はまだ自分たちが異父兄妹であることを知らない。侍萍は、彼らに向かって次のように言う。少し長いが、侍萍の台詞を全文引用しておこう。

「ああ、天は誰が罪を犯したか、誰がこの罪を作ったか、知っているのだ。－彼らはみんな可哀想な子どもだ。自分がしたことが何か、わからないのだ。ああ、もし罰するなら、私一人を罰してほしい。私一人に罪があり、私がまず歩み間違えたんだ。(悲しげに)いま私はわかった。わかった。事はもうなされてしまったんだ。この不公平な天を恨むこともない。一回罪を犯したら、二回目も自然とやってくるんだ。－(四鳳の頭をなでて)この子たちはみんな私のきれいな子どもたちだ。彼らはちゃんと生きて、幸せになるべきなんだ。罪科は私の心の中、苦しみも私一人が味わうべきなんだ。彼らは快活だ。誰が、これは罪だとわかるだろう。彼らは若い。彼ら自身はわざと誤りを犯したんじゃない。(立ち上がり、天を望んで)今夜、私は彼らを一緒に出て行かせる。この罪を私は知っている。でも罪は私が彼らに替わって犯したんだ。罪は全部、私が引き起こしたんだ。私の子どもたちはみなよい子なんだ。心はきれいなんだ。それなら、天よ、本当に何かあったら、私一人が引き受けるんだ。(振り返って)四鳳－」²⁸

この台詞に、侍萍の人生観が凝縮されている。罪は自分がすべて引き起こしたのであり、原因はすべて自分にある。子どもたちには罪はなく、二人の関係の真相も、知らせるべきではない。知らないほうがいいのだ。だから侍萍は、二人に向かって、おまえたちは二度と私に会わない、遠くへいけば行くほどいい²⁹、と言うのである。長台詞の中に“天”という言葉が何度も出てくることに注意したい。この“天”は。キリスト教の“神”(上帝)と似ているようで明らかに違う。“神”なら懺悔し許しを請うことができる。しかし“天”は侍萍にとって不公平であり。しかも彼女自身の力ではどうすることもできず、その所為をそのまま受け入れるしかないのである。

侍萍は子どもたちのせめてもの幸せを願って、周萍と四鳳の関係を二人に知らせなかった。しかし、蘩漪の介入や事情を知らない周樸園の発言により、二人の異父兄妹関係は明らかになってしまう。そして『雷雨』は四鳳がショックで感電自殺し、助けようとした周冲も感電死し、周萍も衝撃の中で拳銃自殺する、という悲劇で第四幕が終わるのである。

侍萍の思想は宿命論としてさまざまな議論を引き起こしてきた³⁰。侍萍自身がその出身、境遇、受けた教育から、天あるいは運命は自分の力では変えられず従うしかない、という宿命論を自己の思想としていたことは確かであろう。侍萍だけでなく、周樸園も第四幕はじめて周萍に向かって「天の意は—ちょっと不可解だ」³¹とつぶやく。

これらの台詞、特に侍萍の台詞は、『雷雨』という作品が西洋演劇の影響下に生まれ、個性の強調など強い近代性(modernity)を持っていることといささか不調和である。そしてこれらの台詞、三人の登場人物が死亡するという悲劇的な内容や曹禺が単行本『雷雨』刊行にあたって付した序に天地の“残忍”、自然の“冷酷”を強調した部分があること³²から、『雷雨』という作品自体が個人の意思では変えることのできない宿命論を基調とした作品だ、という見解も生まれた。

しかし登場人物が宿命論を持っているということと、作品全体の基調が宿命論であることは、銭谷融が早くから指摘しているように、別の問題であろう。銭谷融は『「雷雨」人物談』収録の『「雷雨」の運命観念問題について』³³で、宿命論の問題について、作者の作品に対する解釈の言葉は、作品そのものと同様に分析・研究の対象であり、それを作品を分析する際の指導的な根拠とはできないこと、登場人物の分析だけでは作者の当時の思想に宿命論があったことを証明できないこと、劇中の八名の人物は、それぞれが彼ら自身の強烈な意向と欲求を持ち、すべてが自己の目的に従って行動していること、などを指摘している。侍萍にしても、四鳳を周公館から離れさせ危険な場所から四鳳を守ろう、という目的に基づいて行動しているのである。銭谷融は「あらゆる人物は自己の目的を追求し、自己のためだけに行動し、無自覚のうちに作品の全事件を形作る」³⁴というベリンスキーの言葉を引用し、『雷雨』もその通りだ、と述べている。

侍萍は、『雷雨』登場人物の中でおそらく最も古さを残した人物である。この侍萍の古さをどう考えればいいのだろうか。竹内好は「魯迅には、前近代的なものが多く含まれているが、それにもかかわらず、前近代を含むという形で、やはりそれは近代というほかないようなものである。」³⁵と述べている。同じ事は、『雷雨』という作品にも侍萍の人物形象にも言えよう。『雷雨』は、侍萍という前近代の要素を残すと同時に近代性をも備えた人物を登場させることによって、一九二〇年代の中国の現実をよく反映した作品となり、そのことによって中国の近代劇たり得ているのである。

英文要旨

Cao Yu's "*Thunderstorm*" (Wenxue Jikan, Vol. 1, 3rd edition), published in 1934, represents modern Chinese literature and theater in the 21st century. The important character in the play, Shiping, was a bitter, yet the most sympathetic person throughout the play. In this article, I will first give an overview of the circumstances of the samurai. Shiping was a servant at the Zhou family's mansion in Wuxi, but she fell in love with the young master of the Zhou family, Zhou Puyuan, and bears two children. However, Zhou Puyuan suddenly marries a young lady who has money and status, and Shiping is kicked out of the Zhou family. Shiping throws herself off riverbank, but she is saved. Zhou Puyuan and the others believe that she is dead. Thirty years later, Shiping's daughter Si Feng becomes a servant of the Zhou family in Tianjin and falls in love with Zhou Ping, the eldest son of the Zhou family. Zhou Puyuan's second wife, Fanyi, ends up having an affair with her step-son Zhou Ping because of the suffocation she is experiencing in the Zhou family. Zhou Ping later hates his relationship with Fanyi and develops a relationship with Si Feng. Fanyi senses this and summons Shiping to kick Si Feng out of her Zhou family. As a result, Shiping reunites with Zhou Puyuan, the man who had abandoned her for 30 years.

In this article, I will examine Shiping's character and her fatalism. Next, I will consider the role of Shiping in "*Thunderstorm*" and the modernity of the Shiping figure. The Shiping figure retains elements of pre-modern times, while at the same time possessing modernity. For this reason, "*Thunderstorm*" is a work that truly reflects the reality of China in the 1920s.

注

「」『』は日本語文献、《》は中国語文献

- ¹ 瀬戸宏「曹禺『雷雨』のテキスト変遷について」(『摂南国際研究』創刊号 六五-七八頁 摂南大学国際学部 二〇二三年二月二八日)参照。本稿では注以外の数字は原則として漢数字とし、近年の日本の表記に従う。例えば10は一〇とし、十としない。ただし中国の書籍名など固有名詞は原典の表記に従う。
- ² 《曹禺全集》全六卷(花山文芸出版社、一九九六年七月)。本稿での『雷雨』などの引用はすべて拙訳である。
- ³ 銭谷融《<雷雨>人物談》(上海文芸出版社、一九八〇年一〇月)。
- ⁴ 《<雷雨>人物談》六四頁。
- ⁵ 瀬戸宏「曹禺『雷雨』の近代性」(『野草』六五号、中国文芸研究会、二〇〇〇年二月)参照。
- ⁶ 《曹禺全集》第一卷九七頁。以後、『雷雨』収録《曹禺全集》第一卷は全一と略記。
- ⁷ 曹禺作品と無錫の関係を考察した論考に、郭懷玉《曹禺<雷雨>、<日出>与無錫關係摭談》(《中国現代文学研究叢刊》二〇一一年第一期)がある。
- ⁸ 全一、三一頁。
- ⁹ 晏学《曹禺和他的戲劇人物》(四川人民出版社、二〇一一年一月)収録《愛之罪－侍萍与四鳳母女的結露》。
- ¹⁰ 全一、一六〇頁。
- ¹¹ 瀬戸宏「曹禺『雷雨』周樸園の形象について」(『都市文化研究』二五号 大阪公立大学文学研究科都市

文化研究センター 二〇二三年三月)参照。

¹² 全一、一〇二頁。

¹³ 全一、一三七頁。

¹⁴ 錢谷融《〈雷雨〉人物談》二〇頁など。

¹⁵ 注11に同じ。

¹⁶ 全一、一〇〇頁。

¹⁷ 全一、九七頁。

¹⁸ 全一、一二一頁。

¹⁹ 注9に同じ。

²⁰ 全一、八五頁。

²¹ 蘇民・杜澄夫・張帆・蔣瑞編《〈雷雨〉的舞台藝術》(上海文芸出版社、一九八二年六月)収録、鄭榕《我認識周樸園的過程》。

²² 以下の四つの台詞は、全一、九七～九八頁。

^{23,24} 全一、一〇一頁。

²⁵ 瀬戸宏「曹禺『雷雨』の恋愛観(『中国研究月報』二〇二二年一月号)参照。

²⁶ 祥林嫂と侍萍の対比を扱った論文に、李明軍《“陳旧的玩物”与“可憐的動物”——祥林嫂与侍萍的形象之比較》(《内蒙古民族師院學報(哲学社会科学漢文版)》一九九九年一期)などがある。

²⁷ 全一、一三八頁。

²⁸ 全一、一七一頁。

²⁹ 全一、一七五頁。

³⁰ 潘克明編著《曹禺研究五十年》(天津教育出版社、一九八七年)第一章《〈雷雨〉研究述評》一《關於命運觀念》など参照。

³¹ 全一、一五三頁。

³² 全一、七頁。

³³ 《關於〈雷雨〉的命運觀念問題》。

³⁴ 《關於〈雷雨〉的命運觀念問題》に引用された中国語訳文より。

³⁵ 「中国の近代と日本の近代—魯迅を手がかりとして—」、竹内好『日本とアジア』ちくま学芸文庫、一九九三年収録)。